2023年9月17日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

「絶対」と言わなくていい

［創世記9章18節～29節］

箱舟から出たノアの息子は、セム、ハム、ヤフェトであった。ハムはカナンの父である。この三人がノアの息子で、全世界の人々は彼らから出て広がったのである。さて、ノアは農夫となり、ぶどう畑を作った。あるとき、ノアはぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。カナンの父ハムは、自分の父の裸を見て、外にいた二人の兄弟に告げた。セムとヤフェトは着物を取って自分たちの肩に掛け、後ろ向きに歩いて行き、父の裸を覆った。二人は顔を背けたままで、父の裸を見なかった。ノアは酔いからさめると、末の息子がしたことを知り、こう言った。

「カナンは呪われよ　奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ。」

また言った。

「セムの神、主をたたえよ。カナンはセムの奴隷となれ。神がヤフェトの土地を広げ（ヤフェト）セムの天幕に住まわせ　カナンはその奴隷となれ。」

ノアは、洪水の後三百五十年生きた。ノアは九百五十歳になって、死んだ。

[1]　「絶対」という言葉

ノアの箱舟の話は、一応先週で一番大事な部分は見てしまって、今日の部分はどちらかと言うと礼拝の説教ではあまり取り上げられない箇所かもしれませんね。でも、今日の箇所も、私たちの信仰というものを考える時、やはり重要なことが示されているように思いました。

私たちは時々「絶対」という言葉を使うことがあると思います。まあ、それが「目標」であることを言いかえるものであればそれもありかなと思いますね。例えば「絶対この日までにこれを終わらせる」とか「絶対にこの資格を取る」とか、自分に言い聞かせることというのはあると思います。でも面白いなと思ったのは、今度セリーグで優勝した阪神タイガースの岡田彰布監督は「目標は絶対“優勝”」とは言わなかったのですよね。何と言ったかと言うと、「今年の目標は“アレ”だ」と。「アレ」。「絶対優勝！」なんていう言葉は圧がかかるだけだと思っていたんですね。だから今年夏前に連敗が続いて少々雲行きが怪しくなってきた時にも、記者が監督に「明日は絶対負けられませんね」と水を向けた時にも、岡田監督は「そんな、絶対負けたらあかん試合なんてそうそうあるかいな。勝負に絶対とか使うな」と返したそうです。「勝負に絶対とか使うな」というのはある意味新鮮です。そんな「絶対」からの解放というか、「ユルさ」というのが、私はとてもいいなあ、と思いました。私もそんなユルい人間になりたいなぁ、と思いました。

今日の聖書箇所というのは、ちょっと恐いことが書かれているそんな箇所だと思います。何が恐いかというと、「呪い」ということが書かれていることです。「呪い」というと、何か神様の呪いとか、悪魔の呪いとか考えてしまう訳ですが、今日の所はそういうことを言っているのではないと私は思います。そしてまず申しがたいことは、聖書は私たちを呪うため、また断罪するために書かれている書物ではない、ということです。だって、神様はこの世界と人間を造られた時に「それははなはだ良かった」と“祝福”されたのですよね。そこに、私たちの出発点がるのだと思います。

　また、ノアが作った箱舟が、1年余り漂流したあの大洪水の後、神様はそれこそ、大空に虹を映し出してこのように語られたのです。創世記9章12節以下を改めて読んでみます。―「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々とこしえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」―なんと美しい契約でしょうか。しかもこれは、神様が結んで締結して下さった一方的な、そして永遠的な契約です。人間の側からの約束ではありませんよね。私はもう既にここにイエス・キリストの十字架による贖いの約束が暗示されているようにも思います。私たちがお願いしたからではなく、ただ一方的な憐みの故です。

[2] 「呪い」はもはやありません。

　そうすると今日の箇所で、ちょっと、なんでだろう？思う部分があります。このノアが、酔っ払って自分の醜態を晒してしまったという極めて人間的な描写がありますけれども、―私はこれはノアの失敗かもしれないけれど、かえってあるがままの人間ノアを描写しているちょっとホッとする場面ではないかなと思うのですが―、そのノアに対して二人の息子（セムとヤフェト）はその裸を見ないようにして布で覆ったけれども、ハムという息子は、父のことを告げ口をしたということで、ノアの怒りを買ったと。そして、良く分からないのは、ハムに対してという事よりもその息子カナンに対して呪っているのですね。25節で「カナンは呪われよ　奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ」と。良く分かりませんね。ただ字義通りにとらえれば、自分に子孫に対して呪いの言葉を吐いている訳です。これを、やがてカナン人が偶像礼拝をする民族となるその預言だと考える解釈もあるようですが、どうも釈然としません。私は、これはどう考えてもノアの弱さといいますか（疲れもあったのかと思います）、思わずキレてしまってそういう言葉が出てしまった、ある意味ダメな父さん、限界あるおじいさんノアの姿を、聖書は遠慮なく書いているのではないかと思ってしまうのです。聖人君子ではないのです、ノアは。

　ただ、この呪いの言葉というのは困ります。この「呪い」というのも、一つの圧力と考えることも出来るのではないでしょうか？どういう圧力、どういう呪いでしょうか？人間を破壊する、否定する力です。例えば、「お前なんか生きていてもしょうがない」と。誰もそんなことは言っていないのに心の中で声が響くんです。「あんた、何やってもダメだな」、「そんなことしても無駄だよ。そういう運命なんだよ」という否定的な言葉の方がリアルに響いてきてしまうのです。人間はそういう声になびいてしまうことがあるように思います、誰もがです！私もそうです。でも、その言葉が絶対的な声かといえば、それは違うと思います。ノアが呪いの言葉を吐いたとしても、それは神の言葉ではありません！そうですよね。神様はもうノアと、あなたたち子孫を滅ぼすことはない、という虹の契約を結んで下さったではありませんか！神様が私たちに望んでおられることは、あるがままの私の姿でイエス様に頼って生きてゆくことではないでしょうか。

詩人八木重吉が、「キリストを信じて救われるのだとおもい　ほかのことは　何もかも忘れてしまおう」という詩を書いていました。私は本当にその通りだと思う。私たちが信仰告白をするというのはそういうことですよね。世の中の「呪い」と思えるような言葉はたくさんある。自分を責めてくる言葉が絶対的な権威を持って迫って来るように感じることもあるけれども、「キリストを信じて救われるのだとおもい　ほかのことは　何もかも忘れてしまおう」ですよね。

そして思いました。私たちが「呪い」ということが頭によぎった時、是非このイエス様の言葉を思い起こしたら良いと。ヨハネによる福音書9章の、生まれつき目の不自由な人の問いに主がお答えになった言葉です。この世界に様々な刃（やいば）のような言葉、私たちを脅かす絶対的な言葉があるかもしれませんが、これこそが私たちを造り、私たちへの愛を、虹の約束のように貫いて下さる主の、それこそ絶対的な言葉です。

「さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」

私たちはイエス様によって、もはや“呪い”の許にはありません。この世界に「絶対」のものがあるとしたら、それはあなたを愛する十字架と復活の主の愛です。お祈り致します。

主なる神様、今日もあなたの愛の内に私たちを置いていて下さっていることを感謝致します。私たちは、あなたの言葉よりも様々な雑音や呪いの言葉の方が大きく聞こえてしまうことがあり、私たちを悩ませます。しまし、どうぞ、あなたの確かなお約束を信じる信仰をお与え下さい。「あなたの信仰がなくならないように祈った」とおっしゃって下さる主を信じます。いかなる時も、あなたに向かい、あなたご自身に聞いていくことが出来ますように。主の御名によって祈ります。アーメン。